みおしえ

花を摘むのに夢中になっている人が、未だ望みを果たさないうちに、死神がかれを征服する」（法句経四八中村元訳参照）

この法は仏がサーバティに住んでおられたときパティプージカー（夫を供養する者）と言う女性について説かれたものである。ある時マーラバーリー話は、三十三天界起こったものとされる。（華鬘を運ぶもの）と言う天子が千人の天女と花園に入った。五百の天女は木に登って花を落とし、他の五百の天女は落ちた花を集め、天子を飾った。そのうち木に登っていた一人の天女が亡くなった。

そしてサーバッティの良家に生まれ変わったが、彼女は前世のことを記憶しており、そこで香や華鬘等の供養をしつつ天子の夫の下に生まれ変わりたいと願った。十六歳で他家に嫁いでも比丘たちに食事の供養をしては、これが夫の下に生まれ変わるための功徳になりますようにと言ったため、パティプージカー（夫を供養する者）と呼ばれた。それから彼女は四人の子を出産した。ある日布施をし、法を聞き、戒を守り、その日が終わる瞬間、ある病気のために死去し、天子である夫の下に生まれ変わった。彼女を見た天子は人間界での話を聞いて人間の百年と言う寿命は天子のわずか一日も満たないと知り、「放逸と言うものは寿命のわずかな人間に全くふさわしくない」と思ったという。

彼女の死を知った比丘たちは彼女の奉仕を思い涙を流し、聖者の位に達した比丘達は法の感動を得た。仏は彼女が三十三天界の夫のもとに生まれていることを語り、言われた「生ける者の命は、わずかですそれ故どのような欲にも満足しなければ死神が自分の威力を行使し、嘆き悲しむものを捉えて行きます」と、そしてこの偈を唱えられた。

花ばかり積むことに、とは花園で華鬘作りが種々の花を集めるように欲望と言う花を集め積むことに執着していると、欲を求めて獲得しても満足がないということである。死神により征服されると言う事は、嘆き悲しんでいるものを捉え死の世界に連れ去ると言うことである。

（ダンマパダ全詩解説　片山一良参照）

心の言葉

花と言う欲望の対象を摘むのに夢中になっている人をまだ望みを果たさないうち、死神が彼をさらってゆく

お題目で成仏する十二

日蓮大聖人が提唱された一念三千の「仏の種」を心に植えることによる成仏方法は、下種即脱と呼ばれます。

それは、全人類が心に持つ仏陀の本心「南無妙法蓮華経」を信じ唱えることによる我が身に仏をあらわす成仏法です。

言い換えれば〝我が己心の胸中の肉団に秘奥する第九識の仏性〟を目覚めさせ、自分が仏の生きて活動する分身としての働きを起す方法です。その為に「妙法蓮華経」の一大秘法に、「南無」を冠し南無妙法蓮華経と唱えます。

しかし「成仏」とは、あくまで心の成仏であり。自分が金ぴかの仏像の様になるわけではありません。本当の成仏とは、ただ久遠御本佛の救済の大慈悲心と南無妙法蓮華経の行者が自ら持つ第九識（佛性）との感応道交によって安心立命すすることです。

したがって南無妙法蓮華経の行者は、安心してこの世界で暮らすことが出来ます。これが神秘霊験の奇跡です。素晴らしい奇跡の守護と仏から無限供給される豊かさ中で私たちは日々の生活を送ることが出来ます。

日々の生活の中で唱える南無妙法蓮華経は本仏の使いである守護霊指導霊すなわち倶生霊神の守護を受けます。守護霊指導霊は、眼には言えなくても心に映像を見せたり、声は聞こえなくても想念の囁きを通し私たちを導いてくれます。皆さん「南無妙法蓮華経倶生霊神様ありがとう」。南無妙法蓮華経御本仏様ありがとう」と日々唱えましょう。